The way is open where there is a will

～意志あるところに道は開ける～

キャリア教育部通信　第２号

令和４年４月２７日

中学生の皆さんへ

キャリア教育部

今回は、『２０２４年の大学入試改革　石川一郎著　青春出版社』の「おわりに」の一部を紹介します。著者の思いと私たちの思いは同じです。未知なる未来に向かって逞(たくま)しく生き抜いていく人になってほしいです。

東京２０２０オリンピック・パラリンピックにおいて、日本選手団のメダルラッシュは、自国開催という有利な点があったとはいえ目を見張るものがありました。

そして、日本のアスリートから気がついたことがあります。

「体力に劣る相手に対して精神力で立ち向かい、善戦したものの最後は力尽きて敗れた」

かつて、こんな場面を多く見た気がします。それが今回の大会では、勝利に向けた綿密な戦略が感じられ、途中ハラハラさせられることがあっても、最後はきっちりと勝ち切ることが多かったように思うのです。

「体育会系」という言葉があります。上下関係などの規律が厳しく封建的というイメージですが、「努力、忍耐」「精神一到何事か成らざらん」といった言葉も頭に浮かんできます。近年、この「体育会系」に対してメスが入ってきたように感じています。

「精神の強化」ではなく、「メンタル・トレーニング」

「肉体の強化」ではなく、「フィジカル・トレーニング」

何でも横文字を使えばいいわけではないですが、ニュアンスが相当異なり、「精神・肉体」といった言葉は根性論的なものに感じられますが、「メンタル・フィジカル」といった言葉には**科学的な要素**が感じられます。

外国人の指導者も多くなりました。カリスマ監督の指示通りチーム一丸となって頑張り抜くというのではなく、コーチとじっくり**対話しながらゲームプランや戦略を立てていく。**日本のアスリートも、いつの間にかこのような戦い方ができるようになっていることに気づかされました。

さて、なぜこの「おわりに」に、最近のアスリートたちの取り組みを書いたのか、説明が必要かもしれません。

新学習指導要領では、子どもたちに次のような能力を身につけさせることが目標として掲げられていました。

＊実際の社会や生活の中で生きて働く「知識及び技能」

＊未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」

＊学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」

アスリートたちの取り組みは、ある意味でこの三本柱の精神をそのまま体現しています。

子どもたちが生きていく社会は、これから大きく変化していくでしょう。**働き方や人との関わり方も激変することは間違いありません。**また、相次ぐ災害や環境問題など、まさに**未知なる状況への対応が求められる世界を生き抜く必要があります。**

そんな状況に対応できる力を、ぜひとも身につけてもらいたいと切に願っています。そして、持続可能な素晴らしい未来を**仲間たちとともに創っていってほしいのです。**

体育会系でも文科系でも部活動を通じて、顧問と対話を重ね、上記の＊を体現している人はいるのではないでしょうか。学習においても自分の体現を反映させればよいのです。厳しい社会を生き抜く力は付きつつあるのです。自信をもってください。必ず伸びていきます。いくつもの壁にあたっても、それを一つ一つ乗り越える力があるのです。

考査に向けて、受け身ではなく、能動的に勉強してみましょう。そうすることが自分自身を育てることになるのです。**結果ではなくプロセスを大切にしましょう。**一夜漬けではなく、どう取り組んだのかが重要なのです。結果は後からついてくるものです。

Learning is a lifelong process of keeping abreast of change.